



TITLE:

津村博士ノ國民經濟學原論ニ就イ
テ

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 津村博士ノ國民經濟學原論ニ就イテ. 經濟論叢 1915, 1(1): 119-120

ISSUE DATE:

1915

URL:

<https://doi.org/10.14989/126864>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

經濟論叢

號一第 卷一第

論說

●貧富問題(一)

●でうゐつゝ・ひゆーむノ經濟學說(二)

●地代ノ性質ニ就テ

●地方財政ノ調整

雜錄

●減債基金ト鐵道資金

●獨逸ノ自治制ニ就テ

●戰爭ト社會問題

●津村博士ノ國民經濟學原論ニ就テ

雜報

●租稅ノ新傾向

●佛國ノ外國放資

●佛國植民地ノ現勢

●著名ノ婦人ニ關スル統計的研究

●麥ノ收穫ト米價

●最近人口靜態統計

●日本經濟叢書第十二卷ヲ讀ム

●和田垣教授在職二十五年祝賀

●Robert Meyer 逝ク
●びにーる・るろわ・ばーりゆー氏ノ陳亡

法學博士 田島 錦治

法學博士 福田 德三

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戶 正雄

法學博士 小川 郷太郎

教授 財部 靜治

講師 米田 庄太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 神戶 正雄

法學博士 小川 郷太郎

助教授 山本 美越乃

法學博士 河上 肇

講師 高田 保馬

法學士 大山 壽

法學士 本庄 榮治郎

法學博士 神戶 正雄

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 織田 萬

津村博士ノ國民經濟學原論ニ就イテ

法學博士 河 上 肇

明治四十年初版ヲ出シ廣ク江湖ニ流布セシ本書ハ、近年絶版ニ附セラレ居タリシガ、昨年ニ至リ訂正増補大ニ其面目ヲ改メテ刊行セラルル事ト爲ツタ。思フニ經濟學ニ關スル著書ノ刊行近年漸ク其ノ多キヲ致スト雖モ、本書ノ如ク廣ク各般ノ問題ヲ網羅シ、加フルニ文章流暢、難解ノ個所ナキモノニ至ツテハ、其類甚タ稀デアル。其ノ新版舊版ニ讓ラズ廣ク一般世間ニ歡迎セラレテ、斯學ニ關スル智識ノ普及並ニ發達ヲ助クニ至ルベキハ、余ノ疑ハザル所ニシテ且ツ甚ダ悦ブ所デアル。

併シ文章流暢ニシテ難解ノ個所尠シト云フ本書ノ主ナル長所ノ一ハ、往々ニシテ重大ノ問題ヲ輕ニ論ジ去ルト云フ本書ノ主ナル短所ノ一ヲ伴フノ傾向ガアル。余ハ茲ニ主トシテ經濟學史ノ方面ヨリ、斯カル短所ガ屢々史實ノ曲解トナツテ現ハレテ居ルコトヲ一二指摘シテ見ヤウト思フ。第二編第七章第二節人口問題ニ關スル學說ト題スル所ニ、まるさすノ人口論ノ紹介及ビ批評ガアル。其ノ紹介文ノ冒頭ヲ見ルト

『其ノ後ろばーと・まるさす出ルニ及ンデゴつどうのんノ説ヲ否定シ、別ニ一頭地ヲ拔クノ明快ナル説明ヲ試ムルニ至リ。今其ノ説ヲ紹介セムニ、まるさすノ人口論ノ要旨ハ、要スルニ次記ノ三點ニ歸スルナル可シ』(上卷一六〇頁)

ト書キ出シテアルガ、元來まるさす人口論ノ第一版ト第二版トハ著者自身ガ其ノ第二版ノ序文ニ
 Throughout the whole of the present work, I have so far differed in principle from the former.....
 ...云々トカ In its present shape it may be considered as a new work云々ト云ツテ居ルヤ
 ウニ、其ノ議論ノ内容ガ大變ニ相違シテ居ルノデアツテ、是ガ爲メきやなんノ如キモ『最モ確カ
 ナル經濟學者ガ直下ニ、まるさすノ説キタル人口論トハ如何ナルモノゾトカ、又ハ人口ニ關スル
 なるさす説トハ如何ナルモノゾト問ハレタ時、其答ニ苦ム所以ハ、主トシテ第一版ト其後ノ版ト
 ノ間ニ此ノ如キ變化アリタル結果デアル』ト云ツテ居ル位デアル(註一)。余ハまるさすノ人口論ヲ
 紹介スルニ當ツテハ、まるさすノ爲メニ此點ハ最モ明瞭ニシテ置カ子バ爲ラヌト考フル者デア
 ルガ、今マ津村博士ノ紹介ヲ見ルニ、簡單ニ只ダまるさすノ人口論ノ要旨ハ云々ト書キ出サレテ居
 ルノデアツテ、多少遺憾ナキヲ得ヌ。尤モ其所ノ註ニ

『.....氏モマタ其ノ所論ニ就キ更ニ推展チ重ネタル所アリタルヲ以テ、旁千八百三年ニ至リ、之ヲ訂正増補シテ An Essay
 on the Principle of Population or A View of its Past and Present Effect on Human Happiness, etc.ト改題シ、再版ニ
 附シヌ。是レ我國ニ於テ通常まるさすノ人口論ト稱スルモノニシテ云々』(上卷一六二頁)

ト書キ足シテアルカラ、博士ノ所謂まるさすノ人口論ナルモノハ其ノ再版以後ノ議論ヲ指スノデ
 アラウト想像ハサレルガ、其ニシテハ之ヲ批評シテ『明快ナル説明』ト云ツテ居ラレルノハ、甚タ事
 實ト相違スル。初版ノ議論ハ明快デアツタガ、再版以下ノ議論ハ甚タ不明快ナルモノダカラデア
 ル。何レニシテモ初版ト再版以下ノ議論ガ明白ニ區別サレテ居ラヌノハ、誠ニ物足ラヌ感ジガスル。只
 ダボンヤリなるさすノ人口論ガドウノコウノト云ツテ議論シタ事ガ、從來幾多無用ノ誤解ヲ惹起

セシ原因トナリシコトヲ遺憾トスル者ハ、此點ニ於テ恐ク余ト感ヲ同クセラルルデ有ラウト思フ。猶ホまるさすノ人口論ニ對スル博士ノ批評ニモ余ハ同意シ兼スル者ガ多イ。今マ一一之ヲ列舉スルモ面倒デアルガ、假ニ其ノ結論ヲ見ルニ、

『之ヲ要スルニ、まるさすノ人口論ノ眞價ハ人口ノ増加ハ食物ノ増加ニ優ルノ傾向ヲ有ストイフ點ニシテ、まるさすノ人口論ノ誤謬ハ、人口ノ増加率并ニ食物ノ増加率ヲ以テ常ニ一定不變ノモノナリト斷ゼシ點ニ在リ。而シテまるさすヲシテ此ノ如キ誤謬ヲ懷カシムルニ至レル原因ハ、まるさすガ……人口ノ増加并ニ食物ノ増加タル、自然的事情ニヨルト共ニ、又社會的狀態ノ結果タルモノナルノ理ヲ輕視シタルガ爲メナリ』(上卷一八〇頁)

ト云ヒ、更ニ『サレバ彼ノふりつぽぐいちノ如キモ此點ニ關シ銳利ナル觀察ヲ下シテ曰ク云々』トテ其ノ所論ヲ引キ『サレバ彼ノまるさすノ人口ニ關スル定則ハ此點ニ於テ多少正確ヲ缺グノ嫌アルヲ以テ少シク之ヲ修正シ、人口ノ増加ハ當時ノ經濟的并ニ社會的組織ノ下ニ收得シ得可キ食物ノ増加ニ優ルノ傾向ヲ有スト改メムニハ、眞理ニ庶幾カルベシ』トノ說ニ同意ヲ表シテ居ラルル。併シ此ノふりつぽぐいちノ議論ハまるさすノ所論ヲ能ク詮索セザルヨリシテ起ル無用ノ論デアアル。當ニ氏ノミナラズ、わぐな、しゅもる、おべんはいまゝ等知名ノ獨逸學者モ皆ナ同様ノ批評ヲシテ居ルガ、何ゾ知ラン、食物ノ供給ハ單ニ自然的事情ニ本クノミナラズ、又タ經濟的并ニ社會的組織ノ如何ニ依ツテ左右セラルルモノナルコトハ、まるさす自身ノ既ニ認メテ居タ所デアアル。此事ハ例ヘバ人口論第六版ノ第三編第八、九、十、十一、十二ノ各章ヲ見レバ最モ明白デアアルガ、假ニ一例ヲ舉グルナラバ、まるさす自身ガ次ノ如ク述ベテ居ル。

『史上ニ起リタル人口減少ノ多クノ場合ニ於テ、之ガ原因ハ、暴力、虐政、無智等ヨリ起ル所ノ產業ノ缺乏又ハ其ノ產業ノ誤レル方面ニ歸スルコトガ出來ル。然リ是等ノ原因ハ先ヅ食物ノ缺乏ヲ惹起シ、而シテ其事ハ言フマデモナク、人口ノ減少ヲ伴フ

モノデアル。』(註二)

即チ彼ハ食物ノ増減ガ社會的事情ニ依ツテ左右サル事ヲ明カニ認メテ居ルノデアル。猶ホ穀物ノ輸出入ヲ論ズル章下ニ於イテハ

『地球及ビ地位ニ關シ一定ノ條件ノ下ニ在ル國ハ

其ノ原料の生産物ヲ以テ外國ノ貨物ヲ購買スル方ガ、之ヲ國內ニテ製造

スルヨリ便利ナ場合ガアル。而シテ此ノ如キ場合ニ於テハ、自ラ消費スルヨリモ、ヨリ多クノ原料的產物ヲ產出スルヲ必要デアル。乍併、斯カル事情ハ、其ノ社會ニ於ケル労働者階級ノ永續的狀態又ハ其ノ人口増加率ト殆ト何等ノ關係モナイ。』(註三)

ト論ジ、然ラバ其ノ人口増加率ハ何ニ依ツテ左右セラルヤト云フ點ニ就イテハ、彼ハ進ンデ次ノ如ク論ジテ居ル。

『斯カル事情ノ國精ニ於テハ、人口ノ正確ナル尺度ハ、實ハ食物ノ分量デハナクテ、仕事ノ分量デアル。然ルニ此ノ仕事ノ狀態ハ必然的ニ労働ノ報酬ヲ左右シ、而シテ下層社會ノ人々ガ食物ヲ取得スル力ノ大小ハ、一ニ此ノ勞賃ノ大小ニ伴フモノデアル。……サレバ人口ノ増加ハ主トシテ労働者ノ得ル所ノ眞實ノ勞賃ニ依ツテ左右サレ又タ制限サルルモノデアル。』(註四)

又タ曰ク

『人口ノ増加ヲ制限シ且ツ左右スルモノハ、其ノ國ガ食料ヲ生産シ得ル力又ハ現ニ生産スル所ノモノデハナクテ、實際労働者ノ手ニ入ル所ノ食物ノ分量及ビ價值并ニ其ノモノノ増加率如何デアル。』(註五)

之ニ依ツテ見レバ、まるさスガ生活資料ノ増加ト云ヘルハ、單ニ其ノ生産額ノ増加ヲ指スニ非ズシテ、社會ノ民衆ヲ組織セル個々人ノ消費シ得ル生活資料ノ分量ノ増加ノ謂タルコトガ分ル。サレバ人口ハ生活資料ノ増加ニ伴フテ増加スト云フ彼ノ命題ニ關シテハ、彼レ自身之ニ加註シテ

『茲ニ注意スベキコトハ、本文ニ生活資料ノ増加ト云ヒタルハ、社會ノ民衆ガヨリ多クノ食物ヲ取得スルニ至ルガ如キ場合ヲ指スト云フ事デアル。特定ノ社會ノ現實ノ狀態ニ就イテ云ヘバ、食物ハ増加シナガラ其ガ下層社會ニマデ分配セラレズ、從ツテ人口増加ニ何等ノ刺激ヲ與ヘサル場合ガ儘ニ在ルノデアル。』(註六)

(註二) Malthus, An Essay on the Principle of Population, Lock's ed., p. 429.
(註三) Ibid, p. 363. (註四) Ibid, p. 426. (註五) Ibid, p. 367. (註六) Ibid, p. 14. Ashley's ed., p. 96.

ト云ツテ居ル。而シテ彼ノ意見ニ依レバ、是等生活資料ノ分配ハ富ノ分配如何——勞働者ニ就イテ云ヘバ勞賃ノ高低如何等——ニ依ツテ定マリ、而シテ其ノ富ノ分配如何ハ更ニ又タ種々ナル經濟的并ニ社會的事情ニ依ツテ左右サレルト云フノデアルカラ、彼ガ人口増加ノ標準トシテ居ル所ノ生活資料ナルモノハ、恰モふいりつぽぐるちガ『當時ノ經濟的及ビ社會的組織ノ下ニ於テ收得シ得ベキ生活資料』ト云ヘルト、サシタル差異ハナイノデアル。ふいりつぽぐるちハまるさすノ意見ヲ修正シタト云フケレドモ、まるさす自身ノ意見ガ其ノ所謂修正意見ト略ボ同ジデアル。博士ハまるさすノ誤謬ハ『人口ノ増加并ニ食物ノ増加タル、自然的事情ニヨルト共ニ又社會的狀態ノ一結果タルモノナルノ理ヲ輕視シタル』ニ本クト論斷サレテ居ルケレドモ、果シテ然ルヤ否ヤ、余ニ於テハ疑ナキヲ得ヌ。總ジテなるさす人口論ノ批評ニハ不詮索ニ本ク不忠實ノ批評ガ多イノデアルカラ、而カモ斯カル批評ヲ受クルニ至レルハまるさす自身ノ著述ニモ一半ノ責任アルコト故——獨リ津村博士ニ對シ、殊ニ諸般ノ問題ヲ網羅セル斯ノ通論的著述ニ對シ、餘リニ備ハレルヲ求ムルハ或ハ不當デアルカモ知レス。併シ第四編第七十章第一節價值ノ起因ニ關スル諸學說ノ批評中、勞力說ニ對スル博士ノ説明及ビ批評ノ如キハ、到底餘リニ粗大ニ失スルノ誹ラ免レスデ有ラウ。今マ其點ヲ次ニ述ベル。

二

博士曰ク

『勞力說トハ、りかいど、ばすちあナ始メ舊派ノ經濟學者并ニろーどべるつす、まーくす、らつさる等新派ノ社會主義者ノ主張

セル所ニシテ、財ノ上ニ加ヘラレタル勞力コソ財ヲ生ムノ母ニシテ、勞力ヲ要スルコト多キモノホド價值多ク、其ノ之ヲ要スルコト少キモノホド價值モ亦少シ、即チ勞力コソ財ノ價值ノ高チ決定スル唯一ノ原因ナリトイフニアリ。……畢竟スルニ、何レモ勞力ヲ以テ價值發生ノ唯一無二ノ原因トナスニ於テ一致ス。(下卷五七頁)

之ハ甚シキ誤解デアル。例ヘバ之ヲリカーゴ―ニ就イテ見ルニ、彼ノ議論ニ曰ク

『あだむすみすノ論ジタルガ如ク價值トイフ語ハ二様ノ異リタル意義ヲ有ス。一ハ使用價值ト稱セラルベキモノデ物ノ效用ヲ言ヒ表ハシ、他ハ交換價值ト稱セラルベキモノデアル。此ノ二者ハ必シモ一致スルモノデナク、例ヘバ水ノ如キハ使用價值非常ニ大ナレドモ、其ノ交換價值ハ殆ド無イ。サレバ效用ハ決シテ交換價值ノ尺度トナルモノデハ無イ。併シ效用ナキモノニハ決シテ交換價值ハナイ。效用ハ交換價值ノ成立ニ關シ絕對的ニ必要ヲモノデアル。(註七)』

效用ヲ以テ價值ノ成立ニ關シ絕對的ニ必要ナモノト爲セルリカーゴ―ヲ以テ、『勞力ヲ以テ價值發生ノ唯一無二ノ原因トナス』モノト爲スノ誤解ナルハ、多言ヲ要セヌデ有ラウ。リカーゴ―又タ曰ク

『一定ノ效用ヲ有シ居ル貨物ガ更ニ交換價值ヲ有スルニ至ルニハ、二ノ原因ガアル。其一ハ其物ノ稀少性デ、其二ハ之ヲ取得スルニ一定ノ勞力ヲ必要トスルコトデアル。而シテ貨物ノ種類ニ依リテハ其ノ稀少性ニ依ツテノミ其ノ價值ヲ決定セラルルモノガアル。古書ノ如キコレデアル。……乍併此ノ如キ貨物ハ通常市場ニ於テ交換サル所ノ貨物ノ一小部分ニ過ギズシテ、吾人ノ願望ノ目的物ト爲レル大多數ノモノハ、若シ之ヲ得ルニ必要ナル勞力ヲ投ズルコトヲ厭ハザルニ於テハ、殊ド際限ナク之ヲ供給ヲ増加シ得ラルルノデアル。而シテ茲ニ研究ノ目的物トスル貨物ハ姑ク此ノ如キ種類ノ貨物ニ限り、且ツ之ガ生産ニハ無制限ノ競争ノ行ハレ居ル場合ニ限ルノデアル。(註八)』

之ニ依ツテ見レバ、物ニ價值ヲ生ズル爲メニハ其物ニ效用ガナケレバ爲ラス、ソウシテ既ニ效用ヲ有スル物ガ更ニ交換價值ヲ有スルニ至ルハ、其物ノ稀少性ト其ノ取得ノ困難(取得スル爲メニ一定ノ勞力ヲ要スルト云フコト)トノ二原因ニ本クト云フノガ、リカーゴ―ノ意見デアツテ、且

ツ彼ガ其ノ價值論ニ於テ取扱ツテ居ル貨物ハ、勞働ニ依ツテ隨意ニ其ノ分量ヲ増加シ得ルモノデ、且ツ其ノ生産ニハ無制限ノ競争ノ行ハレ居ル場合ニ限ラレテ居ルト云フコトガ能ク分ル。サレバ津村博士ガ之ヲ評シテ

『此學說ニシテ可ナラムカ、苟クモ勞力ヲ加ヘタルモノハ常ニ必ズ價值ヲ有セザルベカラザルト同時ニ、毫モ勞力ヲ加ヘザルモノハ如何ナルモノモ價值ヲ有セザルベキ道理トナル。更ニ切實スレバ、同額ノ勞力ハ常ニ同額ノ價值ヲ生ミ、異額ノ勞力ハ常ニ異額ノ價值ヲ生ミ、勞力ト價值トハ常ニ必ズ正比例セザルベカラザル道理トナリヌ可シ。然ルニ實際ニ於テ、世上幾多ノ事實ハ、之ニ反證ヲ舉グルモノナリ。例ヘバ、家ニ傳ハル大判小判ノ類ノ一朝金價騰貴ノ結果數倍ノ價值ヲ有スルニ至レルガ如キ、神戸築港ノ結果神戸附近ノ田畑ノ地價ノ上ニ數倍ノ騰貴ヲ見ルニ至レルガ如キ、……是レ皆勞力ヲ加ヘズシテ價值ノ發生セル適例ナリ。』(下卷五八頁)

ナドト論ジテ居ラレルノハ、如何ニモ的ナキニ矢ヲ放テルノ感ガアル。『貨物ノ種類ニ依リテハ其ノ稀少性ニ依ツテノミ其ノ價值ヲ決定セラルルモノガアル、古畫ノ如キコレデアル。』ト云フコトハ、博士ガ大判小判乃至神戸附近ノ田畑ヲ例トシテ非難サレツツアル所ノリかーどー其人ガ既ニ百年前自身デ述ベテ居ル所デアル。或人ノ學說ヲ批評セントスル場合ニハ、固意又ハ過失ニ依ツテ之ヲ曲解又ハ誤解スルコトヲ嚴正ニ戒メテバ爲ラヌ。然ラザル限り、一切ノ批評ハ學問ノ進歩ノ爲メ無益デアリ又タ往々ニシテハ有害トナル。余ココニ感ズルコト久シ、偶々津村博士原論ノ改訂版ヲ批評スルニ當リ、計ラズ是等ノ點ニ及ブ。思フニ博士ノ原論ニ至ツテハ世既ニ定評アリ、是等白玉ノ瑕瑾ヲ指摘スルガ如キハ、固ヨリ其ノ價值ニ累スルコト無ケン。乃チ敢テ直言ヲ恣ニシタル次第テアル。